

1953, 5.11~6.21

国立近代美術館 フィルム ライブラリー



No. 7

フィルム・ライブラリーについて

国立近代美術館では、設立以来同館内に定員約百名の映写室をもつ、フィルム・ライブラリーを設け、内外古今の優秀映画の収集保存ならびにその活用について努力いたしております。

今回は、「日本画の流れ」展の期間中、次の映画を毎日二回上映いたします。

法隆寺の壁画

一巻

法隆寺は今から千三百年前、推古天皇の九年、聖徳太子が斑鳩宮(今のみや)を造営された時に、その近くの地に太子によつて創建された寺です。今の建物については再建・非再建の二つの説がありますが、かりに再建説が認められたとしても、それは我が国のみならず世界最古の木造建造物で、極めて価値の高いものといわれます。この法隆寺の内部には、仏像彫刻・絵画・工芸品など、飛鳥・白鳳時代から江戸時代に至るまでの立派な遺品がたくさん保存されています。しかし、昭和二十四年一月の金堂の火災によつて、金堂の周辺にかかれた壁画の方は惜しくもそのあざやかな色をまったく失つてしまいました。

この映画は昭和十五年秋以来、荒井寛方・中村岳陵・橋本明治・入江波光氏ら多くの画家達が、焼失まで熱心に模写を続けていた当時撮影したものです。壁画は千二百餘年前奈良時代の初めに、割木材で膠糊に小舞を組んだ土壁の上に、白土の上塗をし、その上に胡粉・黄土・鉛丹・緑青・紺青などの絵具で描いたもので、こういう技法は当時のいちばん新しい技法であったと考えられます。例えば鼻や頬にかけをつけて立体感を表わしたり、衣のしわの一方にはかしをつけて凹凸の感じを出したりして、それ以前には見られなかつた描き方があるのですが、これは西域や印度のアジヤンタの壁画等にも見られるところですが、西画は東西南北の四大壁に四仏浄土を、小壁八面に菩薩を扱い、内陣上方の小壁に飛天が舞い、外陣の小壁には阿羅漢が描かれています。なかでも、西大壁の阿弥陀浄土変

はもつともすぐれ、蓮華の上の如來、両脇に立つ観音と勢至、その俯目がらな慈愛にみられた視線は、これを仰ぎ見る人々の魂につよく沁み通つてくるような気がします。

この雄大な力づよい表現を示していた貴重な壁画が焼失したことは大へん残念ですが、原画を偲ぶことのできる精緻な模写に残つておられ、また当時疎閑してあつたため天人をかいた小壁が災害をのがれたことは、せめてもの慰めといえましょう。

二条城

二巻

二条城は関が原の戦の後、徳川家康が上洛の際の居城として造営させたもので、慶長八年(一六〇三年)に大体竣工され、数次にわたつて増築され、景盛時の偉容は今日想像する以上だったと考えられています。その後再三の火災や移転によつて多くを失つてしまいましたが、慶應三年(一八六七年)將軍慶喜がこゝで大政を奉還した事は有名です。現在は京都市に属し、主六古建築(国宝に指定されています)。

名古屋城や姫路城等は攻防に重点をおいて天守閣、櫓等を主としたものですが、この二条城は將軍が上洛の折の宿泊を目的としたため、日常居住の方に重点がおかれ、邸館建築としての特色を備えた形式を持つていて、桃山、江戸初期の武家風書院建築の典型とされています。それに徳川氏の築城には第一に武威を誇つて天下を圧することが目的であつたので、その構想は思い切つて豪放を極め、まことに大時代的な様相を示しています。

現在残つている主な建物としては、先づ二の丸御殿があります。これは二条城の中核をなす建物で、坪数は全部で約二千坪、遠侍・大広間・黒書院・白書院等から成り立っています。この殿舎の障壁画及び天井絵は、寛永年間の頃狩野一派の人々によつて描かれたもので、建物と同時代ではありませんが、綿爛たる桃山精神を伝えています。その他この二の丸御殿の正門にあたる極彩色の唐門、端然として清楚な本丸等がありますが、この本丸は明治二六・二七年に移建された旧桂宮御殿です。

文楽

——人形遣いの妙技——三巻

文化財保護委員会昭和二七年度製作

わが国の数々の古典芸能の中で、人形浄瑠璃はその最も優れたものの一つです。現在はその中で大阪文楽座の活動が主なものとして、文楽といえは人形浄瑠璃を表わすほどになっています。

人形浄瑠璃の起源は、他の芸能文化と同様に約千年前奈良朝に伝来した散楽にまでさかのぼらなければならぬでしょうが、別々に発達した人形と浄瑠璃と三味線の三者が一体となつて、劇場を持つようになつて盛んになつたのは、二百数十年前の事で、有名な近松門左衛門と竹本義太夫のコンビが現われて建てた竹本座がその最初の劇場でした。

文楽座はその竹本座の伝統を現在に伝えていながらも、太夫・三味線・人形の三業の厳格な修業と経済的不遇とは殆んど想像を越える程で、それに加えて文楽座の再三の焼失等によつて、歌舞伎演技の原型として高い価値をもつこの人形浄瑠璃の将来は極めてあやぶまれています。

この映画は文楽人形遣いの至宝吉田文五郎氏の至芸の再現と解剖を意図して作られたもので、世界でも珍しい三人遣いを解説して、文楽愛好家は勿論、一般の人々にも興味以上のものを感じさせるでしょう。

吉田文五郎氏(本名河村己之助)は明治二年生れ、一五歳で文楽の世界に入り、以来七〇年余り人形遣いとして修練を重ね、女形(おやま)遣いを得意とし、先年病歿した吉田栄三氏と並び称せられる名人で、昭和二十四年日本芸術院会員となり、現在八四歳の高齢にもかかわらず舞台上活躍しています。

とり上げられているのは「今頃は半七さん——」の一節で馴染深い「艶容女舞衣」(はですすがたおんなまいぎぬ)「酒屋の段」のお園のくどきで世話物浄瑠璃の代表作です。